「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター　　執筆担当：斎藤登美夫

▼▲▼

◇◆◇　No.0688　◇◆◇　　22/05/25

【　ロシアの侵攻続くなか、通貨を含めた欧州情勢要注意　】

先週もレポートしたように、今年のドル/円相場はなかなかの「大相場」だ。予想を超える積極的な米利上げ姿勢が一時 131.35 円まで進行したドル高・円安の一端を担っていたことは間違いないだろう。
一方、材料面でいえば今年一番と言っても過言ではない「ロシアのウクライナ侵攻」という要因があるにもかかわらず、ユーロの動意はやや鈍い。たとえば年間変動率で見た場合、ユーロ/ドルの変動はここまで 10.08%。主要 5 通貨ペアのなかでは最低だ。そんなウクライナ侵攻の長期化も予想されるなか、別途欧州情勢をめぐり興味深い事象が最近になり 2 つ観測されていた。以下で、解説とともに今後の動きを考えてみたい。

＜＜　ECBの利上げ観測　＞＞

23 日に、ラガルドECB総裁が、ECBの公式SNSに「7-9 月末までにマイナス金利から脱却する可能性がある」ーーなどと投降したことが話題となっている。

周知のように、米国はすでに 5 月 4 日のFOMCで 0.5%の利上げを実施しているうえ、英国もそれに続き 0.25%の利上げに動くなか、ECBは金融緩和政策の維持を続けてきた。もっとも、「2022 年 3 月末で緊急購入プログラム終了」や「今後の方針変更の可能性排除しない」ーーといったように、政策を小出しにし先行きの利上げに向けた修正を少しずつ行ってきたところは日本と異なるところだが、それでも結果として「緩和政策の維持」に勤めてきたことは間違いない。
しかし、いずれにしても「緩和政策の維持」という、根本的な姿勢がようやく転換する公算が高まってきたようだ。

ちなみに、ECBの政策金利は現在マイナス 0.5%。それに対して、前述したラガルド発言は「7-9 月末までにマイナス金利から脱却する可能性がある」とのことなので、これをECB政策理事会の日程と併せて考えると、7 月 21 日と 9 月 8 日という 2 回の理事会で 0.25%ずつの利上げを想定しているのかもしれない（8 月はECB会合がない）。

ただ、ブルームバーグによると、「より迅速なペースでの引き上げを選択肢として残しておきたい一部の当局者はラガルド総裁の姿勢に不満を抱いている」という。
実際、ECB政策委のメンバーでもあるオランダ中銀のクノット総裁は、0.5%引き上げの可能性を否定しない立場を以前から公言しているし、昨 24 日には同じくECB政策委メンバーのカザークス・ラトビア中銀総裁からも「インフレ見通しによって正当化される場合は 0.5%の利上げを検討すべき」とする発言が聞かれていた。今後の欧州を取り巻く経済情勢やインフレなどをにらみつつだが、ヒョッとするとラガルド総裁が想定している「0.25%ずつ 2 回」よりも性急な利上げが実施されることも否定できない気がしないでもない。

＜＜　ユーロ安けん制発言　＞＞

今月 16 日、フランスのビルロワドガロー仏中銀総裁から、「ユーロ安けん制発言」が聞かれると一部市場参加者のあいだで話題となっていた。

トーンとしてはかなり弱く、「初期の初期」といったものだったが、「為替の動きは原則的に市場に委ねる」というスタンスである欧州の要人からこうしたコメントが聞かれることは、歴史的に見てもかなり珍しい。
ちなみに、ビルロワドガロー氏は仏中銀の会合で、「輸入インフレをけん引する要因として実効為替レートの動向を注意深く見守っていく」と述べたうえ、過度なユーロ安は物価安定目標に悪影響を及ぼすことになると指摘したという。

総裁発言が聞かれた前後の実際のユーロ相場を見てみると、ユーロ/ドルは緩やかな右肩下がりをたどる展開で、連日のようにユーロの年初来安値を更新。ついに 1.03 ドル台まで値を下げ、いよいよ「パリティ（1 ユーロ＝1 ドル）」も視界内に捉えられるなかの発言だったことが見て取れる。
そんなビルロワドガロー発言が効果を発揮したのか、ユーロ/ドル相場はそののち反転。本稿執筆時は

1.07 ドル台で推移しているものの、まだまだ予断を許さない状況と言えよう。たとえば、21 日付の有力欧米紙ウォールストリート・ジャーナル（WSJ）では、「ドル高騰で現実味、ユーロと20年ぶりパリティか」――と題した観測記事を報じている。ECBなどが実際の「実弾介入」に動くことは予想しにくいが、ユーロ/ドル相場が再び「パリティ」へと接近する局面では、仏中銀総裁以外の欧州要人からも「口先介入」が観測される可能性を否定できないようだ。（了）

▼▲

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

◆◇◆ Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved ◆◇◆

FX-newsletter